

立原正秋全集

第三卷

立原正秋全集

第三卷

角川書店

立原正秋全集 第三卷

昭和五十八年二月十二日初版発行
昭和五十八年七月十五日三版発行

著 者 立原正秋

発行者 角川春樹

印刷所 新興印刷株式会社

製本所 株式会社鈴木製本所

発行人 株式会社角川書店

東京都千代田区富士見二―十三―三

電話東京二六五―七一一（大代表）

振替東京三一―九五二〇八 二一〇二

Printed in Japan 0393-573403-0946(0)



落丁・乱丁本はお取替えいたします

立原正秋全集 第三卷 目次

白い罌粟

五

鎌倉夫人

八

情炎

二六

薔薇屋敷

三五

解題

武田勝彦
四三

白
い
罌
粟

一

寺石は傾斜のゆるい坂道をのぼっていた。陽は沈んだのに、住宅街にはまだ昼間の熱気が残っていた。

彼は、^{からだ}軀がだるく、頭が痛かった。ときおり右手で後頭部を押えたり、^{こめかみ}顳顬をかるく叩いたりしながら歩いていた。四か月ほど前から、頭の芯が針で刺されるように痛むことがあった。

彼は坂道を右に折れた。そこから串田の家は近かった。彼はこの頃、串田の目を想い浮かべるたびに身ぶるいがした。どうしてこうなってしまったのか、寺石は自分でも判らなかつた。彼は、串田次郎と出あったとき以来のことを幾度か反芻してみるが、いつもある一点が切れて繋げられなかつた。彼は歩きながらだいたい毛のうすくなった頭をしきりに叩いていた。叩くといくらか痛みがやわらぐ気がした。

彼は頭を叩きながら、あれは何か月前のことだろう、と串田と知りあった日のことを想いかえしていた。それは八か月前のことであつた。……

高等学校の数学教師、寺石修は、土曜日の午後、年末手当を要求する県高教組の臨時大会に出かけた。知事代理に要求書を手渡して県庁をでたのは暮方で、同じ方向へ帰る若い同僚の三木と電車に乗ったとき、前の座席にいる若い

男と三木が挨拶を交した。

二人が挨拶を交す前に、寺石はその若い男の風貌にひっかかっていた。電車に乗り後から押されて立った目の前に、その男が坐っていたのである。その男は、美男子でも好男子でもないのに、なにかこちらを惹きつける風貌をしていた。

三木がその若い男と挨拶を交したとき、寺石は、相手の男串田を、自分達と同じ教員かと思った。三木との話しくあいから、二人が久しぶりで会ったことが寺石にも判ったが、三木が微笑しながら話しているのに、串田はまったく表情のない顔で応じていた。妙な男だな、と思ったとき、串田がこっちを見た。寺石は彼の目を見て、やはり妙な気がした。感情のない目、といえば当てはまらないこともなかったが、どこかそれとも違う不思議な目であった。

この日、寺石は、三木にさそわれてその海岸街に途中下車した。そして居酒屋により、彼等三人は終電車の時刻までかなりの本数の銚子を空けた。いちばん先に酔ったのは寺石で、彼は目の前のものが二重に見えるはじめたとき、これはいかん、と思ったが、たちあがれなかった。帰らなければ、という意識ははつきりしていたが、たちあがれなかった。腕時計をみたが、数字が判読できなかった。下りの電車が十二時四十分だということも判っていたが、何度みても時計の針は四本だった。彼はそこで不意に投げやりな気持になり、同時になにか楽しい気分になった。三木と串田を見たら、三木は太り肉のマダムと声高に話しており、串田は姿勢を崩さずに酒をのんでいた。妙な男だな、こんなに酒をのんでいながら表情も崩れないなんて、いやな野郎だな、と思い、しかし、あいつの目はまったくいい、とつぶやきながら、寺石は崩れようとするのを懸命に堪えた。

それからしばらくして彼は、自分の軀が誰かの腕に支えられたのまでは覚えていた。

目がさめたのは暁方で、見知らぬ洋間のソファに寝ていた。部屋の中にはストーブが燃えており、串田がその前の椅子にかけ、サイドテーブルのスタンドのあかりで本を読んでいた。寺石は軀をおこした。

「お目ざめですか」

串田がこう言って気軽に部屋をでて行き、やがて薬や罐かんとコップを持ってきた。

寺石は黙って何度も頭をさげ、薬罐の水をコップに充たし、何杯も飲んだ。

「えらく御迷惑をおかけしたようですね」

寺石は自分の醜態を詫びた。

「だいぶ酔っていらしたから、勝手におつれただけですよ。それに終電車もなかったし。よろしかったら、おやりになりませんか」

串田はテーブルの上のウイスキーの壺をさし示した。彼はコップでウイスキーを飲んでいた。

「いや、もう駄目です。それより、三木くんはどうしました？」

「車に乗せてやりましたから、帰れたでしょう」

串田はウイスキーをつぎたしながら答えた。

ここまでは、はつきりしていた。寺石はいま、串田の家がある別荘地の奥まった住宅街の坂道を登りながら、それから後におきたことを考えなおしてみた。

再び寝入った寺石が目ざめたのは朝の十時だった。雨がふっていた。

串田の妻が食事の支度をしてくれた。

「串田は朝の六時に床にはいりましたから、午後でないと起きませんわ」

食事を運んできたときに串田の妻は言った。広い廊下が食堂になっており、寺石はそこで食事をすませた。廊下の前は庭で、その向うは崖が川らしかった。庭の右は山裾で、庭の左方に母屋が建っていた。

「ここは離れ屋ですか？」

と寺石はきいた。

「ええ、串田の両親の家ですの」

灰色のストラックス姿の彼女は、食卓の向うの椅子にかけており、編物の手をやすめて答えると、再び編物に視線を

おとした。陰翳の濃い顔立で、はりのある目が、前夜の串田の目と対蹠的だった。

「御主人はなにをやっていらっしやるんですか？」

と寺石は訊いた。前夜三人で酒をのみながら寺石はそんなことも訊いていなかった。

「さあ、わたしもよくは知らないんです」

と串田の妻はもういちど編物の手をやすめ、目をあげて寺石を見て答えた。

寺石は、自分がからかわれているのかと思ったが、しかし彼女の表情は真面目だった。妙な夫婦だな、と考えながら、寺石はしかしそれきりで訊ねるのをやめた。

間もなく彼は、なにか妙だ、と考えながら、串田の妻に礼を述べ、傘を借りてそこを出た。

門を出てからふり返ったら、そこは大きな屋敷だった。門柱には、串田惣兵衛、と書かれた大きな標札が掛けてあった。串田の父親の名だろう、と寺石は思った。亭主がなにをしているのか判らないなんて、まったく妙な夫婦だな、と寺石は数度串田の家をふりかえりながら坂道を降りた。雨の音だけがする閑静な日曜日の冬の午前だった。どこからかピアノの音がきこえ、ある屋敷ではシェパードが吠えていた。

彼は、あくる月曜日、学校へでたとき、三木をつかまえ、串田夫婦のことを話した。

「なるほど」

と三木は言った。

「なるほどって、亭主の仕事を知らない細君がいるかね」

「いや、ほんとにあの奥さんは串田がなにをやっているのか知らないんだよ」

「きみはまた妙なことを言うね」

寺石は若い同僚の顔を見て、こいつも妙なことをいうな、と思った。

「いや、ほんとだよ。俺はこう思うんだが、あの奥さんが判らない、と言ったのは、串田という人間が判らない、といった意味ではないかな。寺石さんは知らないかな、旧制中学で絵を教えていた楠木先生を？」

「背のひくい男だろう。会えば挨拶ぐらいはする程度の知りあいだな」

「串田の奥さんは、その楠木先生の奥さんだった人だよ」

「それはまた意外なことをきくな」

「俺も、そうくわしく知っているわけではないが、俺が串田とは戦争の頃の中学で同級だったということは、この前、居酒屋で話したな。そこに楠木先生がいた。その時分、妻を亡くした先生は、となりの高等女学校で絵を教えていた美術学校を出たばかりの女教師と恋愛して再婚した。串田は中学に入ったときから絵に興味をみせ、楠木先生の家に出はいりしていた。先生はその頃、油絵の方で新進として認められかかっていいたから、新しい妻を得たのが転機となり、いい仕事をするだろう、と先生の仲間は噂していた。というのは、俺の兄貴が先生の絵の仲間だったから、その辺のことも俺もきいていたわけだが。先生が再婚したのは、俺達が五年生のときだった。先生の家には、絵を習っている生徒がずいぶん出入りしていたが、串田は絵を眺めるだけで、自分で筆をとることはなかった。それと、そうそう、串田は、先生が再婚する一年前に、四修で高等学校に合格し、俺達の前から姿を消してしまった。あの戦争だろう。たがいになつたかも知らずに戦争が終り、俺は戦後二年目に、電車のなかで、角帽をかぶった串田に会った。寺石さん、この前の夜、彼の目に気がつかなかったかな？」

「いや、それなんだがね、あれは、なんだろうね。冷たいというのか、感情のない目というのか、動じない目だな」

「そうだろう。何年ぶりかで会ったら、あいつの目はむかしとすこしも変わっていないんだ。半分以上が戦争にとられ、みんなぎすぎすした目をしていたなかで、あいつだけは無疵むきずでくぐって来たんだよ。かりにあいつは戦争へ駆りだされたとしても、あの目だけは変らなかつただろうと思う。俺は、あいつが怒ったり笑ったりしたのを見たことがないんだ。それからさらに一年すぎた夏、今度は街なかで彼と出会ったが、このとき彼は、いまの奥さんをつれていたよ。その女のひとが楠木先生の奥さんだった人だと知ったのは、それからしばらく経ってからだった。そのとき串田はもう学校をやめて遊んでいた」

「すると、奥さんの方が年上というわけか」

「そう、五つばかり上じゃないかな。いわば、恩師の細君を寝盗った男になるが、そこら辺のくわしい事情はわからん。判っているのは、かわいそうに、楠木先生の生活がひどく変ってしまった、ということだがね」

寺石は、三木の話をきいているうちに、他人ごとながら、なにか苦い気持になった。それから数日して寺石は串田の家に傘を返しに行った。

あの頃が曖昧なんだ、と寺石はいつも考えた。彼はいま串田の家の門の前にきていた。暮方のひっそりした住宅街の木立では茅蜩がいないでいた。彼は門の前でためらった。たぶん串田はいるだろう、だが俺は、彼と会ってどうするというんだ、いつものように、結局はなにも話さずに帰るしかないではないか。彼はしばらく門の前に立っていたが、やがて肩をおとして坂道をひきかえた。坂をおりながら、眩暈がし、頭の芯が痛んでくるのを感じた。彼は右手をあげ、後頭部を叩いてみた。俺はあの日、傘を返しにここを訪ねてきたはずだったが。……

寒い日だった。

寺石は学校が退けるとまっすぐ電車で海岸街に行き、酒を一本買って串田を訪ねた。歳末のあわただしさのなかで、やはりその住宅街だけはひっそり静まりかえっていた。

串田はストーブの前で本を読んでいた。

寺石は、過日世話になった礼を述べ、さげてきた酒をだした。

「ちょうど切れていたところです。いっしょにやりましょう」

と串田は酒をもらった礼を言うでもなく、ごくあたりまえの調子でたちあがり、コップを二つ持ってきた。

寺石は、生徒の父兄からの届物を受けたこともあるし、また、校長や県教育長の宅につけ届けをしたこともあった。その場合、相手に礼を述べたり、また相手から礼を期待するのが常識で、そしてこのことは、たがいに、どこか

で、ひそかな期待をともなうて意識されていた。だから寺石は、串田から礼を言われるのを期待していた。贈物にたいしての礼とは別に、このとき寺石は、串田からなにか言葉をかけられるのを期待していた。自分でも妙だと思ひながら、串田を訪ねようときめたとき、すでに、ひそかに期待していたのである。

ところが、串田は、別にうれい様子を見せるでもなく、だされた酒を前にして表情ひとつ崩さなかった。

寺石は、なにか言葉をかけてもらいたいと待っていた自分を恥じたが、しかし相手を妙な男だと思わずにはいられなかった。そして串田がコップに冷酒を充たし、無言で飲みだしたとき、為体の知れない苛立ちと嫉妬をおぼえた。その苛立ちと嫉妬がどこから生じたのかはすぐ判った。上司に頭をさげながら教師の地位にしがみつき、因循姑息な毎日を送り迎えている自分が、みじめに感じられたのである。世俗にまるで関心を示さない男にたいしての妬みであつた。停年がきて退職金がいくら、恩給がいくら、とこまかく計算している自分が、ここではまったく無意味だと感じたのである。

しかし寺石は、やはり、串田が話したのを待った。二人とも無言でコップ酒をのんでいるとき、串田の妻が入ってきた。

寺石は、三木からきいた話から、串田の妻が三十五歳はすぎているはずだと考えていたが、しかし相手はどうみても二十七、八歳にしか見えなかった。彼女は酒のつまみをテーブルにおくと、ストープにかかつていた薬罐の湯をつかつてコーヒーを淹れはじめた。

「お仕事はなにをしていらつしやるんですか？」

寺石は串田にきいた。三木は、串田が現在なにをしているのか知らない、と言つていたのである。

「なにもしておりません」

と串田が答えた。

寺石は相手のつぎの言葉を待ったが、串田はそれきり無言で酒をのんでいた。寺石はいたたまれない氣持になつた。そして沈黙を破るように、自分の同僚のこと、殊に三木について語つたが、途中で、自分が相手にとり入ろうとして

いることに気づいた。そして自己嫌悪におちいり、きりのよいところで話を終えようとしたが、話はながくなるばかりだった。

そしてやっと糸口を見つけて話を打ちきったときには、自分ながらなにか白々しい感情になっていた。

「どうも酒にまかせてながながとしやべり過ぎたようです」

寺石はそこで席をたった。彼は、自分が酒に酔って饒舌になった、と相手に認めてもらいたかった。しかし串田はだまって酒をのんでいた。

やがて串田の家をでた彼は、数分前よりも自己嫌悪におちいつていた。これは強烈だった。コップ二杯の酒で酔うわけではないではないか、と自分の饒舌を恥じたが、もう取りかえしはつかなかった。

彼は駅前にでると、県高教組の臨時大会の帰りに三人でよった居酒屋に行った。そこで、為体の知れない屈辱感を酒の酔いでまぎらわそうとしたのである。

寺石はいま、住宅街をおりてきて、八か月前からこの街にくるたびに通いつけているその居酒屋の暖簾をわけてはいった。天井で大型の扇風機がまわっていたが蒸しあつかった。彼は、熱い酒をくれ、と言った。ふところぐあいthat 乏しかったので、足りなかったら借りて帰るつもりでいた。彼は二か月前から、月給の四分の一を天引で差押えられていた。その上さらに組合費や諸費用を引かれると、手もとに入るのは二万円前後だった。さらにその二万円のなかから、学校の共済組合より預かった金を使いこんでいる分を返済していた。同僚達が月賦でこしらえた洋服代金を共済組合の会計をしている彼が集め、洋服屋が金をとりにこないままに、彼はそれを使いこんでしまったのである。洋服屋は、月賦代金が積みたてであると思い、一度に請求してきたのである。

彼は酒をのみながら、高等学校に通っている二人の子供のことを考えた。いつものように、こうなってしまった事なたいするほぞをかむ悔恨にさいなまれたが、打開策はなかった。

どうしてこうなってしまったのか、彼は幾度か考えてみるが、やはりどうしても判らない箇所があった。何度も串